

信 毎 歌 壇

小島 なお選

あの夏の梅のペンションの暮る八等分のバウムクー
ーヘン (小諸市) 加藤 陽介
いつからか地元と呼んでいることに気づいて夏の
星の涼しさ (大阪府松原市) たりりずむ
君とてなにも言はねどわかるなり梅雨の空気の
やうなる気持ち (安曇野市) あづみのマルコ
真夏の麦茶に水崩るよに突如知人の逝くこと淋
し (坂城町) 柄沢 満則
ガーゼ発祥のガザの地なれと身心の傷庇われず星
となる児ら (佐久市) 篠原 敬子
蜥蜴から切り離された尻尾で離婚直後の空元氣
つばい (中野市) 風間 陽介
南天の天辺に咲く朝顔の世界制覇の色は紫
(佐久市) 水間喜美子
午前二時わが苦悶すべて受け止めて優しきチャッ
トGPTは (千曲市) 中村 美樹
闘病の友痛過ぎて電話無理と言いつつ話す治療状
況 (長野市) 金井 秀保
配給の塩は岩塩とんがって鯛の臭い宿しておりき
(小布施町) 市村志津枝

佳作
ファミレスに土用うなぎの旗ゆれて梅雨晴れの空
なぞかれてゆく (長野市) 北沢 京子
病棟の献立記す紙そつと帰宅の厨で作らんとしま
う (松川町) 小川 陽子

選 評

第一首、梅の香り、木目、滑らかな
手触り。切り株のようなバウムクーヘン
の年輪にあの夏を味わう。第二首、いつ
しか自分の暮らす・暮らした町を地元と
呼ぶように。愛着を言葉が教えてくれた。

第三首、梅雨とき特有のあの空気。言葉
にしなくとも、おのずとわかってしまう
君の心奥の空気。第四首、それは前触れ
もなく、さりげなく、突然に来る。カラ
ン、とグラスが鳴るような寂しさ。

米川 千嘉子選

コメ高値なれば空き田を田植えする古希も八十路
も手慣れた作業 (長野市) 青木 武明
物価高景気低迷客足の落ちて指圧師權に苦しむ
(千曲市) 上原 博司
すべては夏の邂逅だから水風船みたいにきみと手
を繋ぎたい (松本市) 飛 和
「これも古い、あれも古い、たぶん古い、きつと
古い」名曲風にうたう日常 (千曲市) 荒井よし子
抽選の米外れたり終戦時の配給キップ思い出す夕
お隣の老大レムは肺を病みゆつくり歩くゆつくり
笑う (千曲市) 石黒 信幸
あとひと月で一歳になる孫あれど我は空想のなか
で遊びぬ (千曲市) 関 津和子
姉ちゃんのお下がりがりなか赤色のランドセル背負
う男の子見ゆ (松本市) 中村 博穂
福神漬けたつぷり乗せて食らひたる少年汗だくの
海の家 (小諸市) 加藤 陽介
足腰の弱りて高原はゴンドラで 霧の中より日本
海探す (飯綱町) 小林 紀子

佳作
毀れゆく体ドックに預けしがエンジン不能波に漂
ふ (木曽町) 新村 亮三
亡き娘より六十年も長く生き夏至の今日われ九十
七歳 (小諸市) 篠原 昭枝

選 評

第一、二、五首、米の不足、高騰に関
わる歌が多く詠まれている。どの歌も的
確で、情報があるのが興味深い。今回の
騒動が今後の農業や食料自給の問題解決
への糸口になればよいが。第三首、夏の

水風船が懐かしい。「水風船みたいに手
を繋ぐ」とはどんな感じか。はかない感
じだと理解した。第四首、思わず笑って
しまった。「これも愛」と歌い出す松坂
慶子の「愛の水中花」のパロディー。

小池 光選

死とともに生きし戦時の若者よ死を遠ざくる我ら
を責めよ (安曇野市) 細川 恒
楽しみに戦友会へは出席し戦争語りぬ父徳久夏
(上田市) 小林さよ子
この暑さ爺さん婆さんではないだろか鼻唄交じりて芋
を煮てるぜ (長野市) せきたつお
寝転びて昭和歌謡を聴くは良し米寿となりし今も
ときめく (飯山市) 柳本 良子
標高は八百三十古屋なれば団扇ひとつで座敷に憩
う (麻績村) 塚原ふじ子
少女期の亡き娘を重ね面影を宿せる孫と夏の町ゆ
く (小諸市) 篠原 昭枝
射るような眼差しむけるベーターウェン音楽室の
古き肖像画 (長野市) 島田 怜子
特養にも歌謡みくれし人おりて声かけくるは励
みとなりぬ (千曲市) 関 津和子
吊り橋から仔猫五匹を捨てた夏自転車転び肘を擦
り剥く (岡谷市) 吉池富貴勇
六月の雨の上がった通学路傘を回して帰る少年
(松川町) 岡 豊村

佳作
躊躇なく優先席に座りおり古稀を過ぎれば許容さ
るると (宮田村) 小田切孝子
半世紀ダンスに納めていた晴れ着舞踊のために袖
を通しぬ (佐久穂町) 石田 弘子

選 評

第一首、8月は戦争の歌が並ぶ。死と
ともにあった80年前の青春。それからな
んと隔たったところにわたしたちは来た
のだらう。「我らを責めよ」の一句が実
に重い。第二首、戦友会には出ていった

が、家族には戦争のことはついに語らな
かった父。その心の中はいかばかり過酷な
ものであったか。第三首、一転してゆか
いな歌。芋を煮るところがおもしろい。
この暑さの中に、なにしてるんだらう。